



足尾銅山三養会

前回に引き続き足尾銅山の話です。今回は生活物資について。2016年まで「三養会」という生活協同組合が、生活物資の供給をまかしていました。それが解散したいま、人口2,000人の足尾の町には、コンビニもスーパーもありません。買物が不便だと思います。

日光市営バスの銅山観光入口で下車すると、そこは通洞と呼ばれる地域です。町役場、観光センター、トロッコ列車などが集まる足尾観光の拠点。バス停の前にプレハブの建物が残っています。それが三養会の通洞売店跡。ミニスーパーくらいの広さがあります。広い駐車場もあり、町の一等地に立地しています。他地域にも何か所か売店跡を見つけました。歩いて買い物に行ける範囲に売店があり、不便さを感じることはなかったことでしょう。

足尾は、山の中。坑夫は渡坑夫が多く、地域に生活拠点を持ちません。したがって、全てを地域内で自足する必要があります。学校や生活物資の調達も自らの手で行わざるを得ません。このうち、飯場で暮らす坑夫の生活物資の調達は担ったのが倉庫制度です。銅山が物資を一括購入し、人々は通帳で買い物をする。購入額を賃金から差引く仕組みです。現金を持たなくても生活できる便利な仕組み。

しかし、この仕組みは坑夫の不満も生み出します。たとえば、1907（明治40）年に起きた大争議（軍隊が鎮圧した飯場組合と坑夫組



▲生活協同組合発祥の地にある三養会跡地

合の争議）時の要求には、「粗悪品を供給するな」という項目が含まれています。

一方、地域にも商店が生まれます。店主たちは、可能な限り生活物資を商店から買ってもらいたい。そう考えるはずですが、そこで、1908（明治41）年、会社が主導して、購買会が発足します。会員は鉱山従業員であり株券を購入した者。取扱商品は、倉庫制度で扱わない品々とし、指定商店から仕入れるという仕組みです（株券は、坑夫の定着策にもなっていたでしょう）。日本の企業が労働者を直接管理し、長期勤続を歓迎し始めた時代です。足尾の各地にできた購買会が合併したのが1931（昭和6）年。第二次大戦後には生活協同組合法上の協同組合となり、鉱山が1973（昭和48）年に閉鎖された後も営業を続けてきました。かつては「生活協同組合発祥の地」という看板も掛かっていたそうです。

街で出会った高齢女性は、「お金を忘れても買い物できた。なくなったので不便だ」と話されていました。

（MBO 実践支援センター代表）

